陸奥新報　平成30年1月1日（月）　3面掲載

佐藤紅緑の少年小説や漫画「のらくろ」などを掲載し、子どもたちの人気を集めた「少年倶楽部」（復刻版、弘前大学附属図書館提供）

佐藤紅緑ら連載「少年倶楽部」、手塚治虫も掲載「漫画少年」…

「昭和の名編集長」加藤　謙一（弘前出身）

「子どものため」一途に

雑誌、漫画文化の礎築く

「昭和の名編集長」とうたわれた加藤謙一（弘前市出身、1896～1975年）は、「子どもたちを明るく健やかに育てる」という信念の下、雑誌作りに生涯をささげた。同郷の佐藤紅緑をはじめとした一流作家の少年誌連載や、手塚治虫、藤子不二雄といった誰もが知る昭和の有名漫画家がデビューするきっかけづくり、読者や投稿者を大切にする姿勢を通じて、子どもたちを夢中にさせる「面白くてためになる」企画の数々を打ち出した。弘前市立郷土文学館では、現代の雑誌、漫画文化の礎を築いたとされる謙一の功績を紹介する企画展も予定している。（一戸崇矢）

晩年の加藤謙一（弘前大学附属図書館提供）

加藤謙一は県師範学校（現弘前大学教育学部）を1917年に卒業。弘前市の富田尋常小学校（現大成小学校）に勤務時の学級雑誌「なかよし」製作に没頭するうちに、「全国の子どもたちが喜ぶ本」作りを考え辞職、上京した。

上京後は25歳で「講談社」に入社。謙一の刷った議案書が初代社長野間清治の目に留まり、入社1年目で雑誌「少年倶楽部」の編集長に抜てきされ、さまざまなアイデアで雑誌を盛り上げた。

連載小説、口絵と挿絵、大型付録、漫画、読者との交流記事に特に力を入れた。謙一の四男で国立公文書館館長の加藤丈夫さん(79)が謙一について記した『漫画少年』物語　編集者・加藤謙一伝」によると、謙一が「少年倶楽部」の編集長を務めた21年には6万部だった年間最大発行部数（新年号）が、後任にバトンタッチする32年には65万部まで達した。丈夫さんは「謙一は誌上で『親愛なる読者諸君！』と呼び掛けており、子どもを何より大事にしていた。それが企画につながった」と語る。

連載には吉川英治ら一流作家の小説をそろえた。中でも謙一の父と同じ新聞社に勤務したことがある佐藤紅緑との出会いが、その後を大きく変えるきっかけとなった。

紅緑は最初、少年誌への連載に乗り気でなかったが、謙一の「子どもは国の宝ですぞ」といった熱意にほだされ、27年5月号から始まる「あゝ玉杯に花うけて」の連載を引き受けた。スタートすると全国から好評の投書が相次ぎ、発行部数も30万部から45万部に跳ね上がった。謙一は自身の著書で紅緑について「先生の小説が子どもを熱狂させたのは、（中略）小説全体を明るくしているユーモアである」「他のいかなる作家にもこのユーモアはない」と振り返っている。ある時、紅緑から「いい漫画をたくさん入れるんだね。雑誌全体が明るくなるし、家じゅうの人がたのしめるからね」というアドバイスを受けて連載した「のらくろ」（田河水泡）の一大ブームにつながった。45年には取締役に就任したが、敗戦の責任をとる形で辞任、退社した。

46年には親戚らが立ち上げた出版社「尚文館」の編集企画を担当、「野球少年」を発行した。アナウンサーに野球の実況放送を誌上で再現してもらう「誌上実況放送」が評判を呼んだ。謙一は野球のルールを知らず、紅緑の息子で詩人、野球ファンだったサトウハチローは新聞のコラムに「野球を知らない加藤さんが、野球雑誌でヒットを飛ばすとは、近頃の七不思議の一つ」と書いた。雑誌はヒットしたが、占領軍からの公職追放令により尚文館を離れた。

47年には「学童社」を設立。妻を社長に、自宅を発行所にし家族で雑誌「漫画少年」作りに奔走した。連載には吉川、紅緑ら「少年倶楽部」時代の作家が駆け付けた。漫画も充実させ、48年2～12月号には「サザエさん」（長谷川町子）も載った。行などにより売り上げが減少した。謙一は顧問として講談社に復帰し、次大阪から来た手塚治虫の東京デビュー作「ジャングル大帝」を連載開始し、人気を集めた。

読者の投稿欄にも力を入れた。力作には丁寧な感想を送り、「漫画少年」はプロの漫画家になるための登竜門と位置付けられていた。石ノ森章太郎や藤子不二雄、横尾忠則らが投稿していたが、刺激の強い劇画の流れ、人気の低下などにより55年に廃刊した。

63年ごろには青森県から文化功労者として表彰を受け、75年、79歳で一生を終えた。丈夫さんは父の年齢を迎え「若い頃は家庭を顧みない父に反発したが、今では編集者として偉大な人だと感じている」と父への思いを話した。

※参考文献・加藤謙一著、講談社発行「少年倶楽部時代」、加藤丈夫著、都市出版社発行「『漫画少年』物語　編集者・加藤謙一伝」、加藤丈夫著「父　加藤謙一を語る」

加藤謙一　略年譜

1896年	弘前市に生まれる
1917年	県師範学校卒業
	弘前市富田尋常小学校教諭
	学級雑誌「なかよし」発行
1918年	富田尋常小学校を退職し上京
1921年	「講談社」入社
	「少年倶楽部」編集長就任
1927年	「あゝ玉杯に花うけて」連載開始
1945年	取締役に就任
	終戦と同時に辞任、退社
1946年	「野球少年」発行
1947年	米国の占領政策により公職追放
	「学童社」設立
	「漫画少年」発行
1950年	公職追放解除
1952年	「講談社」復帰、顧問就任
1955年	「漫画少年」廃刊
1968年	著書「少年倶楽部時代」出版
1975年	がんにより死去

初の年間企画展　弘前市立郷土文学館

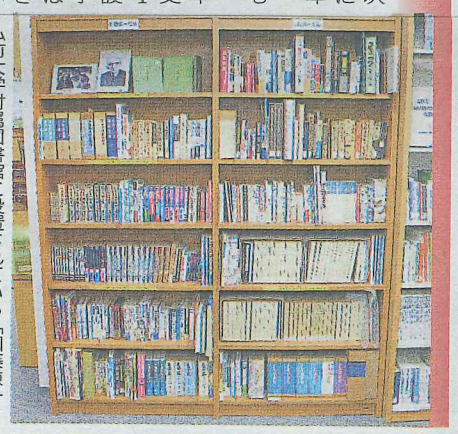
弘大図書館には「文庫」

弘前市立郷土文学館では加藤謙一の生涯と業績を紹介する第42回企画展「名編集長・加藤謙一―『少年倶楽部』から『漫画少年』へ―」が、1月12日から12月28日まで開催される。

謙一にスポットを当てた年間の企画展は同館初の試みで、弘前大学附属図書館をはじめ、県近代文学館、県立郷土館、横浜市の大佛次郎記念館などが所蔵する貴重な資料を展示するほか、今夏に四男の丈夫さんによる講演会も予定している。

同展を企画した同館企画研究専門官の櫛引洋一さん(61)は「謙一は雑誌を単に売り物ではなく、次代を担う子どもたちの心を豊かにするものと捉えていた。幅広い年代から関心を集める内容なので、謙一の情熱や人となりを知ってもらえたら」と語った。

弘大附属図書館は、2010年に「加藤謙一文庫」を開設し、丈夫さんが寄贈した遺品など、約400点の一部を公開している。設置当初、図書館長だった弘前大学名誉教授の長谷川成一さん(68)は「素晴らしい作品を生み出してきた編集者だが、弘前でも知らない人が多い。企画展は謙一を知るいい機会」と話した。


弘前大学附属図書館に設置されている「加藤謙一文庫」。資料の大部分は丈夫さんから寄贈されたもので、現在も収集を続けている

※この記事は陸奥新報社提供です。
この画像は、当該ページに限って陸奥新報の記事利用を許諾したものです。
転載ならびにこのページへのリンクは固くお断りします。
[問い合わせ先]
弘前大学附属図書館　jm3162@hirosaki-u.ac.jp